

いのうえ としひろ

井上 俊博

外国語学部 助教
博士(言語文化学) / 大阪大学大学院☒ ホームページ URL
なし

主な研究業績

- 「マルロー『王道』における共同体と地図」、『フランス語フランス文学研究』第113号、2018年
- 「近代兵器と道：マルロー『王道』に見る西欧の肖像」、『フランス語フランス文学研究』第111号、2017年
- 「マルロー芸術論におけるフォルムと「逆行の芸術」について」、『関西フランス語フランス文学』第22号、2016年
- 「歴史という水槽：アンドレ・マルローの歴史観に関する考察」、『Gallia』第55号、2016年

キーワード

フランス文学、マルロー

研究テーマ Research theme

アンドレ・マルロー作品における
欧州アジア関係と文化変容

概要 Overview

フランスの作家アンドレ・マルローは両大戦間期に中国を舞台とする『西欧の誘惑』(1926)、『征服者』(1928)、『人間の条件』(1933)、ベトナム・カンボジア・シャム・ラオスを舞台とする『王道』(1930)といったアジアを舞台とする小説を発表していった。マルローは1920年代フランス領インドシナに滞在し、植民地政府を批判する新聞を発行し、インドシナの人々の権利を擁護する活動を行ったが、これらの小説作品は革命が続く中国、英仏の侵出に対抗し近代化していくシャムなど、当時のアジアが置かれていた状況を背景としている。

本研究のテーマは上記の両大戦間期にかけて発表されたアジアを舞台とするマルロー小説作品における欧州アジア関係および両者における文化変容である。この時代、欧州だけでなくアジアにおいてもナショナリズムが高まりつつあり、また自由主義経済が世界的に普及した時代であった。現在、このような歴史的背景を考慮しつつ、歴史・文化人類学・軍事など、文学以外の分野の研究も取り入れながら研究を行っている。マルローは先述のように1923年から1925年にかけてフランス領インドシナに滞在しているが、両大戦間期の彼の作品の特徴はアジアという欧州にとっての「辺境」から欧州を、そして世界を考察したその視点にある。彼の作品に描き出されたアジアの近代化、すなわち西欧化や中国やシャムにおけるナショナリズムの興隆、支配力を失っていく欧州と自由主義経済の世界的普及といった要素は、旧植民地諸国の独立と東西冷戦の終結を経た現代の世界へと繋がるテーマである。

本研究では作品が発表された当時の社会的・学術的状況を考慮しつつテキスト分析を行い、マルローのアジア・欧州観および世界の変化に対する作家の思想を明らかにすると共に、今日的視点からその作品の再評価を行う。